

【インタビュー記録】

## 硫黄島民1世・奥山登喜子さんのライフヒストリー ——戦前の生活から、強制疎開と別離を経て、現在まで——

石原 俊 西村 怜馬  
羽切 朋子 羽切 学  
渡邊 英昭

### 解題

本稿は、強制疎開前の硫黄島で生まれ育った、現在（2022年末）89歳の女性が、自らのライフヒストリー（生活史）を語ったインタビューの記録である。

以下の「改題」のうち、「1. 硫黄島の近現代史」「2. 硫黄島の気候・生態」「3. 全国硫黄島島民3世の会の成立とその歴史的背景」については、石原・西村・羽切・羽切（2022）の「解題」と内容が重複している。だが、このインタビュー記録の読者にとって必要不可欠な情報であることから、重複を恐れずに「再掲」した。この点につき、読者各位にはご賢察をお願いしたい。

### 1. 硫黄島の近現代史

硫黄島は東京都心から南へ約1,250kmの太平洋上にある、東京都小笠原村（広義の小笠原諸島）に属する島である。硫黄島は、小笠原群島（狭義の小笠原諸島）の中心である父島から南方約270kmに位置している。

硫黄島は、アジア太平洋戦争の終盤に激しい地上戦が行われたことで、広く知られている。また現在では、全島が自衛隊の管理下に置かれており、一般住民の居住は認められておらず、入島も厳しく制限されている。

一方、硫黄島では、19世紀末に入植が始まって以来、約半世紀にわたって住民が生活をいとなんでいた歴史がある。だがその事実は、日本国内でもまだまだ広く知られているとはいえない。

20世紀前半の硫黄島は、糖業、続いてココ（ココインの原料）の栽培を軸とした、拓殖会社のプランテーション型入植地として発展していった。島民の大多数は、拓殖会社の小作人であった。農業だけでなく、漁業なども盛んであった。

しかし1944年6月、軍の要請を受けた東京都が、硫黄島に住む女性全員と16歳未満・60歳以上の男性の引揚命令を発した。島民の約9割が本土に強制疎開となり、約1割は軍属として島に残留させられた。後者の残留者の多くが、地上戦によって犠牲になった。

地上戦後、硫黄島は長らく米軍占領下に置かれ、島民の帰島は拒まれ続けた。1968年、硫黄島を含む広義の小笠原諸島の施政権が日本に返還されるが、日本政府は硫黄島に自衛隊を駐留させ始めた。本稿が刊行される2023年は、硫黄島民が強制疎開によって故郷を失ってから79年目となる。

## 2. 硫黄島の気候・生態

後述のインタビュー記録において、硫黄島での生活経験が詳しく語られるので、その背景知となる気候や生態について、事前に概観しておく必要があるだろう。

硫黄島は北緯24度45分、東経141度17分の北西太平洋上にある。年間の平均気温は25℃前後であり、夏季の最高気温は35℃以上に達する反面、冬季でも15℃以下になることはほとんどなく、年間を通じて雪や霜は観測されない。また、年間の平均降水量は約1,200mmであり、東京23区の約1,600mmと比べてやや少ない。

硫黄島は火山島であり、19世紀末の入植以降、火山活動がほぼ一貫して継続

している。島内はもちろん、周辺海域にも火山性ガスの匂いが拡がり、地熱が高い地帯もある。

地形は、北東部の元山もとやまと南西部の摺鉢山すりばちやま（旧島民の間ではパイプ山とも呼ばれる）の2つの火山が海岸砂丘によってつながれ、ひとつの島になっている。全体としては平坦であり、島の最高峰の摺鉢山でも標高は約200mに満たない。

面積は2020年時点で約24km<sup>2</sup>であり、東京都品川区と同程度である。だが火山活動による隆起が続いており、今後も拡大する可能性が高い（強制疎開以前の島の面積は20km<sup>2</sup>に満たなかった）。

硫黄島には河川がなく、井戸を掘っても海水の塩分と火山の硫黄分が混ざった水しか採取できない。そのため、真水は天水に頼る他なく、島民はさまざまな工夫を凝らして雨水を溜め、生活用水や農業用水を得ていた。

強制疎開前の植生は、タマナ、タコノキ、パイナップル、パパイヤなど、亜熱帯の植物が中心であった。また、防風林として家屋の庭にガジュマルを植えていたようである。

### 3. 全国硫黄島島民3世の会の成立とその歴史的背景

地上戦後、硫黄島を含む広義の小笠原諸島を占領下に置いた米軍は、小笠原群島（父島・母島など）の大多数の島民と、硫黄列島（硫黄島・北硫黄島）の全島民に、帰郷を認めなかった。このため1947年、小笠原島硫黄島帰郷促進連盟が結成され、帰郷運動を展開したほか、島民の資産保護・権利確保・生活援護といった同郷団体の役割を担った。

しかし、サンフランシスコ講和条約によって、小笠原群島・硫黄列島は引き続き米国の排他的な施政権下に置かれることとなり、島民の早期帰郷の可能性は遠のいた。多くの島民が生活困難にあえぐなか、当面の金銭的補償を求める声が高まり、帰郷促進連盟も米国政府と日本政府に対して補償要求運動を本格

的に展開するようになった。その結果、1950年代から60年代にかけて、東京都・日本政府・米政府からの補償金（見舞金）が、帰郷促進連盟または島民世帯に支払われた。だが、米政府からの補償金の配分方式をめぐって、特に硫黄島民の地主層と小作人層の間で激しい対立が巻き起こり、1964年には帰郷促進連盟が分裂に追い込まれてしまったのである。

翌1965年、分裂した帰郷促進連盟のメンバーを一定程度統合しつつ、福田篤泰参議院議員を初代会長とする財団法人小笠原協会が設立された。小笠原協会は現在でも存続し、硫黄島民の当事者性に寄り添った活動を展開している。

1968年に広義の小笠原諸島（小笠原群島・硫黄列島など）の施政権が日本に返還されたが、小笠原群島の父島や母島の島民に対して、約四半世紀ぶりに帰郷・居住が認められた反面、硫黄列島の島民には、前述のように帰郷が認められなかった。

こうした状況下で1969年、約200名の硫黄列島民が硫黄島帰郷促進協議会を結成し、政府や都に対して帰郷を求める陳情・請願を開始した。また1976年には、約150名の島民によって、硫黄島旧島民遺族会も結成されている。

一方で1971年には、施政権返還前から日本各地に存在していた硫黄列島民の親睦会を組織して、全国規模の硫黄列島民の親睦組織である硫黄島同窓会が結成された。硫黄島同窓会は、21世紀に入って全国硫黄島民の会と改称している。同会は毎年9月の第2日曜日に、川崎駅前の川崎日航ホテルにおいて、年次総会と「島民の集い」を開催している。

また新たに2018年、全国硫黄島民3世の会が発足した。この会は主に、島民1世を祖父母に持つ孫の世代で構成されており、2022年末現在、会員数は35名ほどである。

いま全国硫黄島民3世の会は、かつて存在した硫黄島における生活経験や、強制疎開の経験、故郷を失った島民たちの戦後の生活経験を、克明に記録すべく、島民1世のライフヒストリー（生活史）を聴き取るプロジェクトに着手し

ている。本稿は、石原・西村・羽切・羽切（2022）に続く、プロジェクト2報目となる。1944年の強制疎開前の硫黄島で生まれたいわゆる島民1世は、現時点でも少なくない方が存命している。しかし、1920年代～30年代前半に生まれ、強制疎開前の硫黄島での生活について明瞭な記憶をもつ島民1世は、残念ながらかわずかとなってしまった。本稿が、近現代日本の周縁部で翻弄され続けてきた硫黄島民の歴史経験を、末永く継承していく一助になればと願っている。

#### 4. 奥山登喜子さんの人物情報

奥山登喜子さんは、1933（昭和8）年3月17日、硫黄島玉名山部落で生まれた。2022年12月現在、満89歳である。

登喜子さんは、硫黄島生まれの父・奥山金一と硫黄島生まれの母・奥山しまの（旧姓：菊池）の間に、8人きょうだいの7人目の子どもとして生まれた。上に姉が4人、兄が2人いて、登喜子さんの下に妹が1人生まれている。きょうだいは上から順に、長姉がさと子、次姉が美代子、三姉が1922年生まれの恵<sup>やす</sup>江、長兄が1925年生まれの千里<sup>ちさと</sup>、次兄が1928年生まれ駿<sup>すすむ</sup>、四姉がすみ枝、そして登喜子さん、下に1935年生まれの妹の末子がいた。母親のしまのは登喜子さんが2歳のとき、末子の出産時に亡くなった。父親の金一は中央气象台（現・気象庁）の職員だった。

1944年、登喜子さんが満11歳の時に、硫黄島に住む女性全員と16歳未満・60歳以上の男性を対象に、引揚命令が発せられた。登喜子さんの兄2人は、軍属として硫黄島に残留を命じられた。兄2人を島に残し、登喜子さんは、祖母、父、姉、妹と一緒に本土へ疎開した。横浜に上陸した後、島嶼疎開者の収容施設だった東京都文京区の護国寺を経て、数ヶ月間、文京区小石川に住んだ。

東京大空襲の前に、福島県平駅（現・いわき駅）から小名浜へ向かう途中の親戚の家に、長女のさと子さんとその家族、妹の末子さんとともに再疎開する。

その地で「玉音放送」を聴いた。その後父たちのもとに戻る。父の金一は疎開後も、神田綿町にあった中央気象台の測候所で働いていた。

敗戦後、登喜子さんは銀行で働いていた。夫となる山本実さんは、銀行の得意先である靴の卸問屋で働いていた。2人は紹介を経て出会い、実さんが登喜子さんに一目ぼれしたことから、1957年に結婚した。登喜子さんの戸籍上の苗字は山本になったが、兄2人が地上戦で亡くなり、奥山姓を名乗るきょうだいがなくなったことから、登喜子さんは結婚後も奥山の姓を名乗り続けてきた。

以下、インタビュー本文を掲載する。語り手は奥山登喜子さん、主な聴き手は、本稿の著者でもある、石原俊、西村怜馬、羽切朋子、羽切学（朋子の夫）、渡邊英昭、そしてインタビューに同席した川村直子氏（朝日新聞社）である。インタビューは、事前打合せを2021年12月に行い、2022年5月5日午後千葉県松戸市内の奥山登喜子さんのご自宅で長時間の収録を実施し、2022年10月にご本人への事実確認などを行った。

[ ]内は著者側による補足・解説である。語りのなかで数箇所、こんにちの基準に照らして不適切な表現がみられるが、歴史的背景を重視する観点から、本稿では特に改変を加えていない。また、奥山登喜子さんに近い親族以外の詳細な個人情報や語られている箇所は、プライバシー保護の観点から、適宜削除を行ったり、個人名をイニシャルに変更したりしている。内容に関する責任はすべて、インタビューイである奥山登喜子さんではなく、著者5名に帰するものである。

長時間にわたり、つらい経験を含め、ご自身の人生について語ってくださった奥山登喜子さんに、深い謝意を表したい。

なお本稿は、社会学部付属研究所の2021年度および2022年度「一般プロジェクト」による研究成果の一部である。

### 主要参考文献

- 石原 俊『硫黄島——国策に翻弄された130年』中公新書, 2019年
- 石原 俊+西村 怜馬+羽切 朋子+羽切 学「インタビュー記録：硫黄島民1世・川島フサ子さんのライフヒストリー——幼少期の生活経験から戦時強制疎開を経て終戦まで」『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』158号, 2022年
- 石原 俊 監修／吉井信秋+夏井坂聡子 執筆協力／徳間書店 制作協力『原色 小笠原の魂——小笠原諸島返還50周年記念誌』小笠原諸島返還50周年記念事業実行委員会, 2018年
- 中村栄寿+硫黄島同窓会 編『硫黄島同窓会会報 硫黄島の人びと』創刊号, 1981年
- 中村栄寿+硫黄島同窓会 編『硫黄島同窓会会報 硫黄島の人びと——戦前の硫黄島・現在の硫黄島』2号, 1982年
- 中村栄寿+硫黄島同窓会 編『硫黄島同窓会会報』5号, 1984年
- 夏井坂聡子 著／石原 俊 監修『硫黄島クロニクル——島民の運命』全国硫黄島島民の会, 2016年
- 小笠原諸島強制疎開から50年記録誌編纂委員会 編『小笠原諸島強制疎開から50年記録誌』小笠原諸島強制疎開から50年の集い実行委員会, 1995年
- 長田幸男『硫黄島の思い出——硫黄島墓参資料』2002年
- 都市調査会 編『硫黄島関係既存資料等収集・整理調査報告書』1982年

### インタビュー記録本文

- （羽切朋子）[奥山登喜子さんと墓参で硫黄島に行ったのは、朋子の従妹の]夏美 [= 畔上<sup>あぜがみ</sup>夏美さん：母島在住] と行って、あれもう何年前くらい？
- （西村怜馬）もう10年前くらい？
- （朋子）10年は前だと思う。
- （奥山登喜子） なっちゃんと一緒に行ったの？
- （朋子） そう。それで3人 [= 登喜子さんと朋子と夏美さん] で [硫黄島を] 歩いたんです。
- ああ、そうかそうか。わーわーやりながらね。
- （朋子） うち [= 朋子の実家の水口家] と登喜子さんのところ、近いじゃないですか？

そうそうそう。上 [=奥山家] と下 [=水口家] だからね。

——（朋子）昔の人はよく歩いたなって。うちから [墓参時の宿泊施設である小笠原村硫黄島平和] 祈念会館までは [歩いて] 着かなかったですね。

そうね。

——（朋子）途中で、暑くて汗ダクダクになっちゃって、途中から車で帰った。

昔はとことん歩いたけどね。歩かなかつたら、硫黄島に行った意味がないよ。一番最初に墓参で行った時に、一緒に行った人が「この土の上をどうやって歩けばいいんだろう？」って言ったの。[遺骨がたくさん眠ったままの島の土を] 私は踏みつぶして歩けない、って言っていたのよ。歩くのが怖かった。だって眠っている兄たちの頭を、踏みつぶして歩くようなものでしょう。

——（朋子）[亡くなった時に] どこにいたかって正直わからないですよね……

ここにいたんじゃないかってところは、わかっているんだけどね……

——（西村）（奥山登喜子さん宅への往路で買ってきたお寿司をみんなで食べながら）イクラは硫黄島では食べましたか？

イクラは硫黄島ではとれないよ。でも内地から送ってもらって食べてたよ。みんな取り寄せていたから、内地から。だから食べ物豊富だったよ。贅沢だったよ。

——（西村）お正月もお寿司を食べたって [よく聞いていますが] ……

お寿司はよく作ったよ。

——（朋子）今年の [小笠原村主催の船での] 墓参の案内が来ましたよね。今年はどうされるんですか？ [硫黄島への] 上陸がないから行かないですか？ あのね、ずうっと [硫黄島周辺の洋上を] 周るって言うから、行く。

——（西村）ああ、そうですか！

だって、行かなかつたらね……船上からでも島が見られればいいと思って。

——（西村）僕も行くので。よろしくお願いします。

ああ、そうなの。良かった良かった！



——（西村）一緒に行きましょう！

——（朋子）なかなか行けないからね。良かった。

——（羽切学）同じ集落だったの？

——（朋子）同じ集落ではないの。うち [=水口家] は東集落だけど、登喜子さんは……何て言うんだらう……

——（西村）玉名山 [集落] ？

——（朋子）うちより上だと思う。ちょっと離れている。細かく分かれているじゃん、あの辺って。

——（西村）あの辺りは玉名か、東？

——（朋子）うちが東だから。

——（西村）登喜子さん、新しいおがさわら丸に乗るのは初めてですか？  
新しいって言ったって。いつでもいつでも新しい船が出ているから。



——（西村）（笑）

ほんとよ。

——（西村）2017年に新しくなったから。[自分が行った直近の墓参は]最後の古い船 [=おがさわら丸]で行って。

——（朋子）私たちは新しい船で行ったから。2017年に行ったから。

私も全部乗ってると思うよ。新しいのはいつから？

——（西村）5年くらい前ですね。

だったら乗ってると思うよ。

——（朋子）ずっと行けなかったですからね。

コロナだかなんだか知らないけど。楽しみにしていたら、コロナが出てきちゃったんだもの。

——（西村）そうですね。

——（朋子）今年は上陸できると思ったんですけどね。最近は飛行機 [=東京都主催の自衛隊機による] 墓参でも行ってないですか？

飛行機ではね、何年か前かな。行ったの。

——（朋子）私は、コロナに入ったばかり、2020年の2月の飛行機で行きました。都が開催するから、なかなか難しいですよ。

そうなのよね。1回行ったって、2回行ったって、何回行ったって連れて行ってくればいけないか、ってねえ。

——（朋子）好きな時に [島に] 帰れないから。飛行機が出るわけでもないし、船が出るわけでもないし。

そうなのよね。船で硫黄島まで乗せてってくれるとかね。それくらいサービスしてくれてもいいと思うけど。ほんとよ。

——（朋子）ほんとに……

だんだん歳をとってくるから、行ってもわからないだろうって考えかもしれないけど、歳をとればとるほど思い出って深まるものなのよね。いつだって行

きたいのよ。

——（朋子）やっぱり、ちゃーちゃん [= 朋子の祖母の川島フサ子さん] とも、  
そういう話になります。

元気？

——（朋子）元気です。[2022年] 5月22日で93歳になります。

ああ、そう。

——（朋子）登喜子さん、おいくつになりました？

うーんとね。わたし今89か？

——（朋子）もう89歳ですか？ あの一緒に歩いていた頃、70代だったってことですか？ すごい！ ほんとに長い距離だから……スタスタ歩かれて。

硫黄島の土を踏んだら、疲れなんてないですよ！ 足が軽々と動きますね。

——（朋子）ちゃーちゃん [= フサ子さん] も一緒！ ジャングルの中もふつうに入っていくから。

そうでしょう？ ジャングルって言うけど、あの中なんて私たちふつうにグルグル入っていくから。玉名山のところは特に深いからね。岩もあるしね……うちは海岸に近い方だから。セイモ海岸。覚えてる？ セイモ海岸。

——（西村）はい。登喜さんが子供の時に遊んでいたところですよ？

そう。帰りたいな。行きたいな。行くだけでもいい……行きたい。

——（朋子）やっぱりちゃーちゃん [= フサ子さん] は、今回上陸しないから行かないって。

ああ、そう。上陸しなくても、船の上から見るだけでもいい。

——（朋子）だから行こうよ、って言ったんですけど。迷惑もかけるし、って。どうしても自分の足で[硫黄島を] 踏みたいみたいです。自分の生家とか、[フサ子さんの] お兄さんがいたであろう釜場 [= 海軍204設営隊釜場跡] とか。貨物廠 [= 陸軍硫黄島臨時野戦貨物廠跡] とか。

そうそうそう。釜場にいたの？

——（朋子）弟が釜場で、お兄さんがすごい下の方に、下りて行く方の、貨物廠ですね。

貨物廠にいたの？

——（朋子）そこで配属されていたらしいです。でも正直、最期はどこにいたのかわからないです。

私もね、[歳が] ずっと上だけど、いとこの人が去年かな？ 一昨年かな？ 行ってきたって言うんで、話したけど……

——（朋子）登喜子さんのところには、DNA鑑定の話とか来ていますか？

——（西村）今、厚生労働省から遺骨収集した後で、遺骨のDNAを調べるために親族のDNAを[採取して調べるようになった]……

ああ、そんな話あったけど、来ていないよ。できるものなら来てほしいわ。

——（朋子）うちも来ていないんですよ。

——（西村）うちは、僕の祖父の妹のところにはガキと、検体を送るキットも来て。自分の髪の毛とかを入れて送ると[調べてくれて]、遺骨のDNAと一致すると遺骨の身元が分かります、と。

そんなこと何も言ってきていないよ。

——（西村）だから全員じゃないんですね？

——（朋子）全員じゃないんだよ。うちにも来ていない。

なんで全員に送ってくれないんだろうね。自分は向こう [=硫黄島] に11歳までいたでしょう。その年齢でもって、[当局は] 考えてやってるのかな？

——（西村）どうなのでしょうね？ でも、僕の叔父のところにも来たんですよ。叔父は2世なんですけど。

馬鹿なことするねえ……

——（西村）登喜子さんは1世なのに来ていなくて……

どういう調べ方をしているんだろう？

——（朋子）厚生労働省でしょう？

誰が作っているの？ その名簿……

——（朋子）住所とかも変わっていないのに。うちも、怜馬君から聞くまで知らなかった。

——（石原俊）東京都が厚生労働省にちゃんと名簿を渡していれば、それに基づいてやっていけば、こんなことにならない。

最初、東京都がやっていたのかも知れないけど、どこかにやらせているんじゃないのかね？

——（西村）来たり来なかったり。ねえ。

（写真を見せながら）これが、私の戦死した兄が載っている写真 [= 集合写真]。こっちから二番目、先生の前にいるの、うちの兄は……これがうちの長男 [= 長兄] だわ。奥山千里。

——（朋子）おいくつ上でした？

長男は昭和元年 [生まれ] ですからね。

——（朋子）うちのちゃーちゃん [= フサ子さん] より4つ上だから。存命していたら97歳ってことじゃない？

そうですね。昭和3年生まれが次男 [= 次兄]。この写真とか見たことない？

——（朋子）うちはこっちに来て、東京の空襲で [写真などが] 全部燃えちゃったんですよ。

あら、そうなの……

——（朋子）なんにも残ってないんですよ。

この椅子に座ってるのが [次兄の] 奥山駿<sup>すすむ</sup>。昭和3年生まれ。

——（西村）末子さんはここにはいらっしゃいますか？

——（朋子）末子さんはまだ生まれてないでしょう。

——（西村）そうかそうか。

長女がこれでしょう？ 次女、三女、長男、次男でしょ。[私は] その下だから。

—（西村）[三女の] <sup>やすえ</sup> 恵江さんは？

恵江姉さんはこれ。[5人の] その下に私のすぐ上の姉がいて、私がいて、妹がいる。

—（朋子）末子さんとは一緒に硫黄島に行っていたから。

そうよね。あの人も亡くなっちゃったから。

—（朋子）ずっと仙台の方 [に住んでいたの] でしたよね？

そう。

—（西村）恵江さんは、うちのばあちゃん [=菊池康子さん] との話がよく合って……

—（朋子）同級生でしたっけ？

同級生で、一番の仲良しだったの。だからわたしも、康子ちゃん康子ちゃんって言って [慕っていた]。だいぶ年上なんだけどね（笑）



——（西村）これはよく見る野球の写真ですね。これ、なんか結構鮮明じゃないですか？　うちにあるのは、こんなに鮮明じゃないですよ。

——（渡邊英昭）そうですね。たぶん、いろんな方が持っているんだけど [オリジナルではなく] 複写してね。これなんかは、オリジナルに近そうですね。

——（川村直子）すごいきれいですね。

硫黄島は野球が盛んだったのよ。うちの父親がピッチャーやっててね。みんな打てなかった、って言ってたね。

——（朋子）へえ。

うちのお父さんのボールは打てなかった、ってね。この中に野球の写真もあるでしょう。[報道関係者に写真を] 貸したのかな？　貸してって言うから貸すと、どこいっちゃったかわからなくなって困るのよ。

——（西村）写真を見させていただいて、渡邊 [英昭] さんはデジタル化してくださってるんですけど、この構図 [=集合写真] の写真っていっぱいあるんですね。

——（渡邊）裏側に [日付や情報が] 書いてある場合もあるんですけども。

あるのよね。でもほとんど書いてないのよね。

——（渡邊）あとは、アルバムに貼ってあるもので、横に [日付や情報が] 書いてある場合もあるんですけど、なかなか [書いてあるものがない] ……特定ができないですよ。本人が写っているとかわからないと。あと、何か写真のアルバムがあったと思うんだよな（と探しに行く）。

——（朋子）怜馬君ちのは戦前のはアルバムになっていたの？

——（西村）アルバムから写真をはがしてきたみたいで。たぶん全部は持ち切れなかったんじゃないかと。

——（朋子）かっこいいよね。おしゃれじゃない？　怜馬君ち [の祖母の康子さん] は22歳くらい？ [強制疎開の時] 成人していたんだもんね？

——（西村）そうですね。登喜子さん、この写真って最近新しく写真にしたん

ですか？

ちょっと見せて。こないだ取材にいらっしゃるって聞いたときに、私、焼き増ししたの。

——（西村）そうなんですネ！　ここ [=胸の部分] のユニフォームのアルファベットはどんな意味なんですか？

うーん、知らない。こちらも同じ印をつけているでしょう？

——（朋子）チーム名とかはわからないですか？

チーム名つけるほど [硫黄島に] そんなに大勢いないもん（笑）

——（朋子）野球が一番流行っていましたか？

そうね、野球と相撲と。お相撲も盛んだったよ。

——（西村）島対抗とかもあったんですか？

島対抗野球？　それはどうしたんだろう？　そこまでは聞いたことなかったね。でもやったんじゃないかな。硫黄島だけじゃ [何チームも作れるくらい] 人数もないから。うちの父親は、父島だ、母島だって行ったり来たりしていたから。そういうこともあったんだと思いますよ。今ほど、船の速度も速くなかったから、何日もかかってね。それでも、こういうものだと思ってね。苦も無くやった生活だったと思いますよ。

——（朋子）登喜子さんは引き揚げまでは、硫黄島を出たことはなかったですか？

ないないない。出たことなかったですよ。

——（朋子）怜馬君ちのおばあちゃんは出ていたみたいです。

康子ちゃんでしょ？　上の人たちは出るけども、私たちは小学生だったし。

——（朋子）父島にも、北硫黄島にも行ったことなかったですか？

ないない、全然。

——（西村）引き揚げの時にはじめて島の外に出たんですネ？

そうよ！



——（朋子）うちのチャーちゃん [=フサ子さん] もそうだから。16歳だから。

そうですよ。島を出た人はほとんどいないですよ。仕事している、うちの父親なんかは行っていたけど。横浜が好きだったみたいです、うちの父親は。横浜によく行って。横浜でお料理習ったみたい。うちの父親は料理人で。硫黄島で、どこのうちで結婚式だっていうと、そのお家でお料理作りに行ってきたから。自分の包丁持ってね。

——（朋子）働いていたのは、旅館とかですか？

働いていたのは、気象庁。[当時は] 気象台っていうのかな。今でいう気象庁ね。

——（朋子）お料理を作るのが好きだった？

好きだったみたいね。それで料理を作ってみようって気になったってことだったんじゃないの。[家でも] うちの父親が料理を作っていたからね。

——（朋子）どんな料理を作っていましたか？

あんまり憶えていないけど、いろんなものを作ってくれたわよ。天ぷらとか、煮物とかは得意でおいしかったけどね。あとはアレンジしたりとか。それで喜ばれて。他所さまで宴会とか、お祝い事があるとお料理作りに行つて。

——（朋子）具材はなんでしたか？

具材は島のもの。お魚でしょ。あとお肉だって結構あったのよ。牛も飼ってたし、豚も各家庭に必ずいたし、鶏も豊富にいたから。だからお肉を食べたことない [=知らない] ってことはなかったですよ。

——（石原）牛のお肉も食べていたんですね？

ありましたよ。私は子どもの頃はにおいが苦手、牛は食べなかったんですけど。島には屠殺場ってところがあってね。鶏は各家庭にいっぱいいたからね。鶏がこっちにコッココッココって来るじゃない？ そうすると向こうの方に卵産んでるかもしれないって言ってみると、12個くらい卵があるの。コカの木って、コカから麻醉を作るんだけど、あのコカがいっぱい生えてるんですよ、各

家庭にあって。

——（西村）そんなにあったんですね？

そうですね。ココが生活の「糧」、仕事だから。「ココの木が」こんな丸くなるから、その下に卵が産んであるの。見つけるとうれしくてね（笑） 洋服のここにいれてね。

——（西村）卵は全部持ってきちゃうんですか？

そう、全部持ってきちゃう（笑）

——（西村）鶏は帰ると卵がなんにもないんですね。

ないの。でも知らないでいると、ひよこを連れてくるよ。

——（石原）鶏はどれくらい飼っていたんですか？

どれくらいだろう？ 何十羽って。ガジュマルの木って、この家くらいの「大きさになる木」、その間にとまるんですよ、鶏が。いっぱいいましたよ。

——（石原）飛ぶんですね？

飛ぶのよ、枝から枝へ。飛び跳ねてました。そういった経験はね、子供の時に。

——（朋子）お芋をふかしたりもしましたか？

さつまいも？ 学校に行く途中にふかしておくのよ。硫黄でしょう？ 硫黄島っていうだけに、ほんと、地熱が熱いんですよ。学校の人が穴掘って、そこにお芋埋めておいて、草をかぶせて。そうすると学校から帰る時にはふけているんですよ。それを食べながらみんな帰るの。

——（朋子）それをみんなやっていたって言うから。

お野菜も豊富だったしね。畑は各家庭でやりましたね。ないところ「＝畑を持っていないところ」はうちの畑を貸して。マンゴーなんかはね、この家の大きさ「くらの木が」20本くらいうちがあったから、何百個できるでしょう？ 食べきれないからね。だからね、作ってないところの人たち、元山の人とか「にあげる」。元山は町なんですよ、お店があったり。だからうちに貰いに来るのね。あれを売ってね、お金儲けしていたらずいぶん儲かっただろうね（笑）

——（朋子）今は高級品だからね！

〔硫黄島の人たちは〕みんな同じ家庭の人たちと思って生活しているからね。他人じゃないんですよ。

——（朋子）登喜子さんが以前硫黄島に行った時に、うちにパイナップル畑もいっぱいあったって……

そうそう、パイナップルもあったしね。レモンも、こんな大きいのがなるのよ！ 硫黄島のレモンは香りが良くてね、子供ながらに憶えているの。それでこんなに大きくなるのよ。

——（朋子）緑のですか？ 黄色のですか？

黄色になりますよ。でもね、青めのを取ってもお料理のときに香りがいいから。うちの母親が、私が2歳の時、うちの妹 [=末子さん] を産んだその日に亡くなったんですよ。だから私は母親の記憶がないんですよ、抱かれた記憶もないし。写真に撮られるのも大嫌いだったって人で、カメラ持ってる人が来ると逃げ回っていたっていうから。だから母親の顔も知らないの、いまだに。おじさんが20軒くらい、写真を探して当たってくれたけど、どこにも載ってなかった。まあ、あの最中で写真なんて持ってくる人も少なかったと思うけど。だから、まわりのおばさんたちが大事にしてくれたけど、だけど実の母親は恋しいわね。

——（朋子）きょうだいの中で、母親似の方はいますか？

うん、上の、長女と三女が似ていたって。だから姉ちゃんの顔を見てたら母親の顔がわかるっておじさんに言われたけど、だけど実の母親とは違うでしょう？

——（朋子）実際どんなだったんだろうって思いますよね？

写真もないんだもん。亡くなった時の写真もないから。何とか顔見たいって思ったけどね。

——（朋子）ということは、登喜子さんちは硫黄島にお墓があったってことで

すか？

そう、硫黄島にあるよ。西海岸の上の方、島民墓地で。あそこがまさに島民墓地だから。今の島民墓地とはちょっとずれているけどね。広いから墓地 [の敷地は]。

——（西村）登喜子さんは戦後に最初に硫黄島に行ったのはいつですか？

私は、一番早いんじゃないかな。東京都が連れて行くって飛行機で行ったの。

——（朋子）その頃は船ではなく、飛行機だったんですね。

——（石原）昭和40年の最初の墓参の時でしょうか？

42年か、3年かな？

——（石原）43年は [施政権] 返還の年ですよ？

最初に行った時は兵隊さん [=自衛隊] もあんまりなくてね。宿舎も、あんなに立派なのじゃなくて、ふつうの家みたいなのでした。その後、島民が行っても自衛隊の宿舎を借りて泊まれるようになったでしょう？

——（西村）日本に返還されて……

返還されてすぐでしたよ。行かれるって言ったら、行こうと。とにかく2人の兄にね、お線香なり、お菓子をお供えしたいっていう気持ちが強くて。だから今でも行くと、お菓子とお水とお茶を置いてきてあげるのよね。

——（西村）引き揚げてきて、空襲に遭われましたか？

あったよ、すごかったわよ。硫黄島と変わらないよ。東京の文京区にいたの。昔は小石川って言ったのよ、凸版印刷かな、大きい印刷工場があったの。そのすぐ脇だったの。それで3月10日より前の、大きな空襲があって。それで私たちは福島へ疎開したのよね。その時は、ビルの壁に隠れて [助かった]。ビルの屋根 [は天井が抜けて] 何にもないの。焼夷弾をババババって落としていく飛行機が見えたから、目の前にね。それで私たちが、運が良く、命拾いしたのが。神田川が流れていたんです。知っているでしょう？ 川のすぐ淵のところに私たちがいたの。川の向こうは神楽坂。向こうは [爆弾をたくさん] 落とさ

れて。私たちは「川を挟んで」こっちだったから助かったの。あとで、川の向こうへ行って見てみよう、って言うたの。でも、父親に怒られて。「あんなの見るもんじゃない！」って。犠牲者がゴロゴロしてたの。川の向こうとこっちで「状況が全然違った」……命拾いができたの。だから、ここまで長生きができたの。

——（朋子）家は燃えなかったんですか？

その時は燃えなかった。でも、その後に燃えちゃった。もう、危ないからって、3月10日の前に福島に行ったの。その年の8月15日に終戦だから。

——（西村）では終戦は？

福島にいたの。平っていう駅 [=現・いわき駅] から、小名浜へ行く途中に「住んでいた」。何て言ったっけな、あの町の名前？ 忘れちゃったな……3年くらい前に友達と旅行に行ったんですよ、2組で。そっちを通ってくれたんですよ。そうしたら、懐かしくてねえ！

——（朋子）なぜ、福島だったんですか？

わたしのいところがね。硫黄島に来ていたの、福島の方が。そして私のいところ、その方が結婚したの。その伝手で福島へ行ったの、父親が頼んでくれて。

——（朋子）うちは、開拓で、[栃木県] 那須 [に集団入植したメンバー] だったんですよ。

那須に行ったの？ 苦労したらしいわね、那須行った人たちは。私は姉さんがいたから生活ができたけど。[那須に行った] 男の同級生に、「苦労したんだぞ！」って言われても「わかるわけじゃない？！」って言ったの（笑）子どもだからわかるわけじゃない……

——（朋子）みんな苦労しましたよね。

親の苦労が並大抵じゃなかったと思うよ。まず着るものを用意しないとでしよう？ [硫黄島の人たちは] 真夏の洋服しかないんだから。冬がない島だから、真冬でも夏の格好だから。長袖なんか持ってなかったですよ、みんな半袖

で。ありがたいことに、私のいとこがね、私より年の離れたね、その人が東京で洋服屋さんをやっていたの。それで着るものは調達できたの。

——（石原）食べるものはどうされていきましたか？

食べるものは配給でしょ、お米は。でも、父親が气象台に、気象庁に行っていたから手に入るんですよ。だから食べるものっていうのは、困らなかったですよ。周りの人には申し訳ないけど。ひもじい思いをしたってことはなかったですね。

——（朋子）東京でも？ 福島でも？

福島でも困らなかったよ、米どころだから。自分たちでお米を作っても、余力ってものはあるわよね。

——（石原）お父様は内地に来てから、どのようなお仕事をされていたのですか？

同じ。气象台に勤めたの、今で言う気象庁だと思うけど。あの頃は气象台、气象台って言ってたけど。東京の、大手町というかな、神田橋の近く。昔は都電が通っていたね。錦町っていうところ。

——（朋子）気象庁の仕事で硫黄島に渡ったんですか？

違う違う。もともと、父親は硫黄島で生まれてるでしょう。ばあちゃん [= 父方の祖母] がいたからねえ。うちのおばあちゃんの写真なかった？（写真を見て）そうそうそう、かわいいおばあちゃんでしょう？ 大事にしてくれてね……

——（朋子）お母さまがいないから……

おばあちゃんがかわいがってくれてね。だから、おばあちゃんの死に水をとるまで、そばに寝ていたからね。

——（朋子）おばあさまは福島と一緒に来たんですか？

おばあちゃんは昭和21年、終戦になって間もなく亡くなったの。ばあちゃんが亡くなったのは、2月だから。うちの父親が自転車の……リヤカーにばあちゃ

んを乗せて移動するのを見たからね。だから戦争のただなかに[生きて] いましたよね。いやあ、どんな思いでいたろうね。[自分は] 子どもで夢中だったからね。ばあちゃんはね、2人の男の孫を[島に] 置いてきたでしょう、2人しかいない男の孫[を2人とも]。だからすごく嘆いていたよ。ばあちゃんっていうのは、孫ってかわいいもんだ、まして男の子でしょう？ [上から] 女3人続いて、男2人でしょう？ 喜んだでしょうね。それで、その下は女3人だからね。

——（朋子）ほんのちょっとの年齢差で[島に] 残ったり、残らなかつたり。

いろいろなところで[みなさんは] 活動されているから、[声を] 大きくして[言って] ほしいですね。もう、硫黄島には帰りたくても帰れないんですもの。ふるさとでありながら、生まれて育ってもね。いまだに、戦争が終わっても、帰りたくても帰れないでいる。

——（西村）日本なのに、っていう話ですよ。

そうよ。

——（朋子）疎開する前に、硫黄島での空襲もあったと思うんですけど、憶えていますか？

憶えています。憶えています。私、家の中にいたの。ちょうど、15日で。開校記念日で、学校がお休みだったの。

——（石原）[1944年] 6月15日？

そう。それで家にいたんですよ、皆ね。姉たちは友達のところに行っていて。私は庭にいて、丸飛びして遊んでいたの、一人でね。丸飛びって知ってるでしょう？

——（朋子）ケンケンパってやつですね。

そう。あれやって遊んでいたの。兵隊さんが下の方に訓練に行ってたんですよ、セイモ海岸っていうところに。その兵隊さんがドドドって走ってくるんですよ。だから、「どうしたの？」って私は聞いたの。「早く防空壕に避難しろ！」っ

と言われて。それで空襲なんだなって、わかったのね。うちにいてお人形さん抱いてうろうろしていたら、家の人たちはみんな防空壕に行っちゃたの。ここからね、通りまで離れているんですよ。うちから飛び出して、上を見たら。あの時はB29っていうのはなかったから、グラマンだったのね。それが、中に乗ってる向こうの人 [=米軍パイロット] が顔出して見てるの。[上を見ている] 私と目が合ったの！ それで私は手を振ったのよ（笑） そうしたから見逃してくれたんじゃない？

——（朋子）手を振っちゃったんですか？

うん。それで見逃してくれたんじゃない？ それまで機銃掃射をしていたのを止めたのよ、私ที่บ้านから飛び出して手を振ったから（笑） すぐ手前まで弾が落ちてたんだけど。後で見たら、機銃掃射の弾がいっぱい [落ちていた。うちの] どこかにあったはずだけど。

——（西村）拾ってきたんですか？

拾ってきたの。どこかにしまい込んだから [わからないけど]。

——（西村）うちのばあちゃん [=康子さん] は、艦砲射撃にあったって言ってました。

艦砲射撃は、最後の最後よ。東から撃って、西へ、筒抜けちゃったの。小さい島だから。それで、低く撃ったわけでしょ？ 近くへ。遠くへ飛んじゃうから。東から撃ったのが、うちの元山は真ん中辺なのよ、ちょうど。そうしたら、家のすぐそばへ落ちたの！ ポーンってなってね。防空壕の天井が落ちてくるかと思うくらい [揺れた]。うちは、近所の学校の先生の家族と一緒に、防空壕に避難していたんだけど。2家族で、防空壕に入っていたんだけど、私の2歳上の娘さんがその家族にはいたんだけど、ワーワーワー泣いてね。死んじゃうよ、死んじゃうよって泣いてたけど、私は知らん顔してたのよ。そうしたら向こうのお父さんに怒られていた。「見てみろ、トキちゃんは泣いてないだろう。年上のものがワーワー泣いてどうするんだ！」って。怒られてたけど



ね……アメリカ兵が飛行機から半分 [= 半身] 出ているのよね。それで下の様子を見ているの。女の子 [= 登喜子さん] が壕に向かって走って行ってるから、可哀そうだと思って撃たないでくれたのかなって思って。それがやっぱり人間かなって思ったねえ。女の子だから助けてくれたんだろうか？ ましてや、子どもだったからね。駆けっこが早かったわけではないよ（笑）

——（石原）ほんとに何回も命拾いをされているんですね。

ほんと。うん。だから、こうして80半ばを過ぎたけど、生きているんじゃないの（笑）でもやっぱり、苦勞して引き揚げてきた親きょうだい、あと残って、惨い [目に遭った] 兄2人がいたから。私が元気で [硫黄島に] 行って、できる限りのご供養をしてあげたいと思って。今はもう一人になっちゃったけど、一人でご供養しているのよね。うちの仏様、見て行ってくださいよ、ちゃんときれいにしてあるから……

——（西村）引き揚げの時は、また島にすぐ戻れるっていう感覚でいたんですか？

そうそうそう。すぐ戻れるって、また帰ってくるんだからって。

——（朋子）何を持って出たんですか？

お人形さん。ぬいぐるみっていうのかな、自分で着せ替えをする、着せ替え人形。あれを持ってたのね。[硫黄島の家では] 一人で着せ替え人形で遊んでいたのね、それを抱えて。頭の上を飛んできているのよ、飛行機が。

——（朋子）[上空から] 硫黄島の様子が見えるんですね？

ガジュマルの木が大きい [から隠れている] って言っても、人が生活している、通りもある、庭もある。だって、飛行機は低い [= 低い高度で飛んでくる] もの。顔がはっきり見えるくらい低く飛んでたんだもの。だからね、[子供だったから] 怖いものも知らず。機銃掃射に撃たれるとも知らず。弾が自分の体に当たったら死んじゃうんじゃないか、とか考えたこともない。

——（石原）6月15日の空襲から、引き揚げまではどれくらいの期間がありま

したか？

7月の7日に硫黄島を出たの。引き揚げ者がね。それが、私たちの船は2便だったから。7月の初め頃 [= 3日] に第1便があったのね。[今でも] みんな覚えてるのよね……

——（石原）それで父島に行かれたんですよね？

父島では降りなかったの、危ないからって。1便の人たちが父島に降りて、まだ内地に行かれなくて留まっていた。2便は父島に寄らないで、内地に直行したの、横浜へ。だから1便の人たちより早く内地に行けたの。

——（西村）うちのばあちゃんは1便に乗っていて、父島で空襲警報が鳴ると、あそこの隧道 [= 現在の大村トンネル] に逃げたって話していた。

——（朋子）3便も父島経由なんだよ。うちは3便だったんだけど。

2便だけが直行だったんだね。

——（朋子）なんか、途中で船が狙われちゃったのがあったんですよね？

私の乗っていた船が狙われたの。

——（朋子）それだ！

それで甲板に上がりなさいって言われて……

——（朋子）一般人ですよ、っていうのを見せるために……

そうそうそう。それで、浮き輪？ それを付けて、みんな上がりなさいって。

——（西村）ジグザグの航法で行ったって……

そうそう。

——（西村）どれくらいかかったんですか？

7月の13日頃に横浜に着いた。

——（朋子）横浜に着いてどう思いましたか？

私は、硫黄島を離れたことが悲しかったけど、何が悲しかったって、土がなかったの。草も生えていないし。だから言ったの、「これ、どこを歩くんだい？」って。ここが道だよ、道路だよって言われても、だって土がないじゃな

いって [思った]。硫黄島はどこでも草が生えているでしょう？ だからそれが寂しかったねえ。

—— (石原) 横浜で何泊かされたんですか？

結構いたんじゃないかな。私たちは [東京に移った後、文京区] 音羽の護国寺っていうところに部屋を借りてね。だから今でも護国寺さんとお付き合いしていますよ。硫黄島にお墓があるけれど、こっちに持ってこれないから。護国寺にお部屋を借りているんだから、これも何かのご縁だろうからって、箱だけだけど。兄たちの戦死公報が入ってる。

—— (石原) 護国寺は家族で住まわれていたんですか？ それとも他の方も一緒？

父島も、母島も、硫黄島も一緒。広いお部屋。幼稚園の園児が勉強する講堂だったから、広がったですよ。

—— (石原) 集団生活ですね。

そうそうそう。お寺さんって、けっこう幼稚園をやるでしょう？ そこで長くいたのかな。姉たちが近所の人に誘われて、だから9月頃だったかな、梨を買いに行くって言うから、「梨ってなんだい？」って (笑) 見たことないから。食べたこともないから。[硫黄島は語尾が]「なんだい？」っていう、こういう言葉なのよね (笑)

—— (西村) 言いますね！ 最後が上がるんですよ。

[その時の] 梨の香りが [その後] 懐かしかったね。梨に香りなんかなくて言う人もいたけどあるよ (笑) 今、改めて嗅いでみるとないわね、あるって言うほどは (笑)

—— (西村) たしかにレモンとかを比べると……

全然ない。でも硫黄島のレモンは立派だったよ。レモンはね、全家庭にはなかったの。石垣の石の間に [レモンの木を] 植えるのよね。こんな大きい実がなるのよ。

——（西村）今の硫黄島では、レモンがなってるのを見たことないですね。

——（朋子）今は無くなっちゃったんじゃない？

今はないよ。あそこにある、島民墓地の横に私が植えたの、行った時に。Mと一緒に苗持って行って。今もあると思うよ。この前行った時はあったよ。

——（西村）月下美人は、戦前は珍しくはなかったですか？

珍しくはない。家のね、玄関があって、縁側があったの、鍵の字 [=L字型] にあって。向かい側に岩があって、庭の横に。そこに月下美人、サボテンって言って。ずーっとあったの。[花が咲くときは]「早く起きておいで！」って。「寝坊していると見られないよ！」って [起こされた]。あれは、日が当たると萎んじゃうからね。立派なサボテンよ。

——（西村）9月くらいですか？ 咲くのは。

何月だろうか？

——（西村）すぐに、短時間で萎んじゃうんですね。

そうそう。[墓参に] 行ってる時に咲いたことあるんじゃない？

——（西村）そうですね。僕も行きました、その時。

そうでしょう？ 行ったでしょ。西の近くのところじゃなかった？

——（西村）漂流木のところだったと思います。

そうだよな。

——（西村）あのあたりでおばあちゃん [=康子さん] が生まれたところでした。

そうだよな。あのあたりもガジュマルの生い茂った木の下に家があって、ガジュマルの木が家を台風から守ってくれるんですよ。

——（西村）台風は当時も来ましたか？

台風はすごいわよ！ 歩けないわ、すつとばされちゃうわよ。一回ね、妹と元山 [部落] におつかいに行ってたの。元山から離れて原っぱに入る手前で、すごいスコールが来たの！ 息ができないんですよ。ほんとよ。降ったり止んだりじゃないからね。バーって降るから。で、私は妹をかばうでしょう？ そ

ういうことが一回ありましたね。でも、どんな子どもでも妹は守ってやろうっていう気持ちになるのね。

——（石原）それは台風だったんですか？

違うの、ふつうのスコール。台風なんていったら、表歩かせてもらえないよ。吹き飛ばされちゃうから。

——（西村）台風が来るって言ったら、測候所、気象台から連絡が来る？ お父さんは良く知ってますね……

そうそうそう。だけど、ほんと、経験させてあげたい、硫黄島の台風を（笑）硫黄島の全部の面を、みなさんに知ってほしい。私たちは命がけだったけど。いろんな経験をしてきたね、子供ながらにね……

——（石原）台風の時は学校は休みですか？

休みになりますね、もう歩けないから。でもね、うちは玉名山〔部落〕だからね、うちから家を出て玉名山〔の山中〕に入ると、雨も漏らないんですよ、木が生い茂っているからね。だから傘もいらぬのよね。

——（西村）登喜子さんは、引き揚げ後は福島の小学校に通ったんですよね？  
そう。

——（西村）小学校では、硫黄島の話はしたんですか？

うん、聞かれるの。言葉のアクセントがあるでしょう？ いまだに〔島の〕アクセントが取れない〔＝取り払えない〕からね。今も言われるよ、言葉にアクセントがあるねって。でもしょうがないよ、生まれたところがそうなんだからね。いきなり東京弁をしゃべれと言われても、どんなもんだか知らないもん。逆に強く出ちゃうよ。「何も苦労してね、疎開してきて、生まれたところの言葉が濁っているからって笑うことはないだろう」ってね。その後は何にもなくてね、仲良くなりましたけれども（笑）

——（朋子）硫黄島という島に興味は持たれなかったですか？

あのね、硫黄島って言っても、知らないから。小笠原にあることも知らない



から。ただ「硫黄島からの引き揚げ者」だって、言葉にアクセントのある……

——（石原）[東京の] 小石川の時は学校に行っていましたか？

行っていました。<sup>かなとみ</sup>金富小学校っていうところ。

——（石原）福島にはいつまでいらっしゃったんですか？

昭和20年の、秋ごろかな。東京に戻ってきたの。父親と、病気で若くして亡くなった私のすぐ上の姉と、その上の姉と、3人で東京にいたんですね。私と妹と、一番上の姉の家族と一緒に、福島に疎開していたんです。

——（西村）終戦の玉音放送は福島で聞いたんですね。

聞いた。天皇陛下の言葉だから聞いてみようと思ったけど、天皇陛下ってこういう言葉なんだって。私たちに硫黄島の言葉があるように、陛下もおんなじね [=言葉がある]。聞いたことあるでしょう？

——（西村）あります。

昭和天皇ね。

——（西村）おばあちゃん [=康子さん] は [埼玉県] 東松山で聞いたって言ってましたけど、「なんて言っているのかわからなかった」って言ってましたね。

ああ、そう？

——（西村）ラジオの電波の入りも悪かったのか、よく聞こえなかったのかも知れません。

やっぱりね、上の方だから、私たちがベラベラ話すのとは違うのよね。ほんとにいろんな経験をしてきたね。ただ残念なのは……兄の話になると、言葉が出ないね。どこかで生きていてくれないかな、と思う。なんとかね、小舟があったんだからグアムへ行って……グアムが近いからね、硫黄島から。兄たちがグアムに行ってくれたらな、と思いますよ。私たちとは [違って] 疎開できない、残されたんだからね。でもね、悔しいのは、私のずっと年配だけど [男性の] いとこがいるんですけど、その人は無事に [硫黄島地上戦から] 帰ってきて、会いに来てくれて会ったけど……私はちょっと悔しかったね。兄 [の駿] の話も聞いたのね。駿は俺の横を歩いていて……横っ腹に弾の破片を受けて苦しんだんだよって。そんな話はしないでくれって。生きて帰ってきてほしいと待ち望んでる身内に、そんな話してくれなくていいって思ったのね。悔しかったよ、その話を聞いて……

——（西村）その話は最近ですか？

だいぶ前。その人も、その当方で90いくつだったからいないんじゃないかな、[硫黄島地上戦の] 生き残りだからね。

——（朋子）それでも駿さんの何か [=遺品など] は戻ってきてないんですか？

目撃者がいて、そういう話を聞くだけで、何もない。それどころじゃなかったでしょう、自分が、自分の命で精いっぱい。誰か、連れて逃げて行ってくれれば良かったな、とは思うけど……でも、その当時のことを考えれば、自分

の命を守ろうってことだけで精一杯だっただろうからね。

——（朋子）基本的には、戦うつもりで残されていないですよね？ 島の人たちは。

うん。戦うと思っていない。島に兵隊さんがいっぱい来たでしょう？ 島ではお水をタンクから汲むってことすら知らないからね、内地から来た人は。この家の大きさくらいのタンクが、各家庭にあるんだからね。一個は必ず[どの家にも]ある。そこにつるべを下ろしてね、汲むんですよ、って教えてね。かまども大きいんですよ！ うちの5つくらいあったのかな。うちは大きかったから。

——（朋子）そういうことを教えたり、食べ物を準備したり。硫黄島の人が残された理由ってそうだったって言いますよね。

そうそうそう。兄たちも自分の家を使って、ご飯準備したりしたんでしょう。上の兄がご飯炊く役をやったみたいね。まあ、姉が言った。「ご飯炊くことをしたこともない人が、どんな思いでやったんだろうね」って、よく話してたんだけどね。だから何でもやってたんだろうね。ただ空襲だからって、逃げ回るだけじゃなくて。そういうみんなのご飯の支度をやってたんだよね。

——（朋子）お兄さんたちとの思い出はありますか？

牛飼ってたんだけど。上の兄からは、「ご飯食べたら歯を磨きなさい。勉強しなさい。お姉ちゃんの手伝いをして、お掃除をしなさい」って[しつけられた]。私が女の子だからそうさせようとしたんじゃない？ 上の兄はしつけの方をやってね。下の兄は、自分がかわいがっていた牛の餌を取りに行ったり。ちょっと山に行くといっぱい生えているからね、牛の餌はね。その枝を切りに行くの、私を連れて行ってね。下の兄とはそういうことをやっていたの。だからいつでも連れて歩いてもらったの、下の兄にはね。

——（朋子）牛の餌って何の木ですか？

ガジュマルの木はあんまり食べないけど……何て言ったっけ？ 度忘れしちゃった。赤くなって、黒くなった実を食べるの……桑の木！ 桑の木はいっ



ばいありましたからね、野生でありましたからね。あとは、グァバっていう、うちには十何本ありましたから。コカ畑があって、その間に、グァバと、マンゴーの木が生えていて。家のすぐ後ろにマンゴーの大きな木が3本並んで生えていたの。マンゴーの木は17本あったの。引き揚げるときにどこに何本ある、どこに何本あるって数えてきたの。トイレの先に1本あった、この先に何本あった、コカ畑の方に何本あったって全部覚えている。コカ畑の方にガジュマルの木があって、その間には桃の木があったの。桃の木っていうのは、めったなところにはなかったの。

——（石原）[硫黄島に関しては]初めて聞きます。

甘くておいしい実がなるのよ。食べましたよ。私たちは柔らかくなる前、硬いのを取って食べようと思って。硬い桃も甘くて、香りが良いのよね。なんでも果物は柔らかくして食べればいいってもんじゃないわよね（笑）おいしく食べられる時期もあるからね。

——（石原）お父様は气象台のお仕事もありながら、コカ畑もやっていたんですか？

2人の兄も[手伝って]いたし。若い人、知り合いにいっぱい男の人たちいるでしょう、そういう人たちも手伝ってもらって刈り込むわけ。

——（石原）それで会社に納めるんですね。

そうそう。乾燥場って言ってね、元山[部落]に行く中央にあるんですよ、大きいところが。そこへみんな持って行って、焼いてね、蒸してね。

——（石原）お父様はもっぱら公務員ですか？

そうです。おしゃれな人でね。こういう土にまみれて仕事をするのは嫌だったみたいですよ（笑）「ほんとに、あんたのお父さんはおしゃれさんで有名なんだよ！」ってよく言われました。おばさんやおじさんに言われましたよ。おしゃれでないより、おしゃれな方がいいでしょうって言いましたけど（笑）

——（西村）硫黄島の人っておしゃれな人が多いですよ。

多いね。

——（朋子）（硫黄島神社をバックに写っている男性の写真を見ながら）この方はおしゃれですね！

それはね、学校の先生でね、私の義理の兄になるの、一番上の姉の旦那。

——（石原）戦後初めて、島の人で集まられたのは、[小笠原島硫黄島婦郷]促進連盟の集まりですか？

そうですね。

——（石原）戦後すぐに有楽町で集会がありましたよね？ あれは行かれましたか？

行きました。父親と一緒に、真っ先に行きました。父親に連れていかれたの、硫黄島のこういうのがあって。私はなんか知らないけど[硫黄島のことに]一生懸命なものでね。姉もいましたけど、私ばかり連れて歩いてくれたんですよ、島のことでね。だから自然と硫黄島のこつていうと私に言ってくるしね。[今では]きょうだいも誰もいなくなって、独りぼっちになってしまいましたけどね……

——（西村）中学生の時から、硫黄島の集まりに参加されていたんですね。

そうですね。父親が誘うの、私を。話がわからない年でもなかったですからね。14歳とか。

——（朋子）登喜子さんは昭和9年生まれですか？

8年。だから15歳くらいの年から、父親に硫黄島のこと [=集会への参加、帰島運動など]、やるように言われていたから。だから姉なんかよりも、私の方が全部、硫黄島ことはわかってましたね。またね、私のきょうだいっていうのはね、ダメなの、弱くて、優しくて……

——（朋子）気持ちが？

そう。私は……おてんばっていうのかな（笑）

——（朋子）男兄弟のすぐ下ですしね。

そうそう。私のすぐ上の姉が19歳で亡くなってるからね。可哀そうだったよね、葉がなくてね……

——（西村）イメージですけど、末子さんを（登喜子さんが）引っ張って、硫黄島の墓参に行っていたイメージがあります。

そうそう。恵江姉さんはけっこう歳が離れてるもんね。

——（西村）うちのばあちゃん [= 康子さん] は大正12年生まれだったんですよ。恵江姉さんは大正11年だよ。

——（西村）ばあちゃんは早生まれなんで、それで学年が一緒なんですよ。

だけど、私は硫黄島のことを忘れろと言われても、忘れたくないよりも、忘れられないね。忘れられたくもないし、忘れられない。だって大事な2人の兄を取られちゃってね、こんなに厳しいことはないですよ。もう言葉が出ないからね。泣けてくるから……自分でお台所でご飯の支度をしながらね、硫黄島のこと思い出して、2人のあんちゃんがいてくれたらなって、思い出すんですよ。泣きながらご飯作ってるから……

——（朋子）うち [の祖母のフサ子さん] も兄2人を硫黄島で亡くしているから。お兄ちゃんの話ばかりするし……

あなたの家のお兄ちゃんと、うちの兄は仲良くしていたみたいよ。

——（朋子）家も近かったし。

ちょうど [水口家は登喜子さん宅から] 元山 [部落] に行く中間でしょう。よく遊んでいたみたい。玉名山 [部落] から下りてきて、角を曲がればうちでしょう？ そのまま下、下りてって。下にも友達がいるから。Yさんって。そういう友達なの、うちの兄とお宅 [= 水口家] のお兄ちゃんと、Yさんのお兄ちゃんはね。

——（朋子）登喜子さんちの一番上のお兄ちゃんですか？

そう、上。フサ子さんがよく言ってたもん、仲良くしてね、よく遊んでいたもんだよ、って。

——（朋子）遊び方も一緒だし、牛の世話の話も一緒だし。登喜子さんちと一緒にで、[フサ子さんは] お兄ちゃんへの思いが強くて。

そうでしょう。お宅も2人だもんね。

——（朋子）そのためにも [= 兄の追悼のためにも]、硫黄島には行きたいと言っているし。

わたしはもうね、去年 [= 2021年] の12月にお客さんが来たから、じゃあ今玄関開けるねって行ったら転んでしまって、そうしたらここ [= 大腿部の骨] 3ヶ所 [骨折した]。今は杖つかなければ歩けないんだけど。退院して2ヶ月以上経ってますけど、痛くて……

——（西村）リハビリをやっているんですか？

やっている。すぐ近くに医療養護老人ホームがあるから、デイサービスに行ってるの。一人でうちにいてもつまらないから。行けばお仲間がいるから、おしゃべりはできるから。先週の金曜日行ったんだ。

——（西村）そこでは故郷の話はするんですか？

しないしない（笑） 小笠原って言ったって、知ってる人いないから。でも、[気にしてくれる人がたまにいて] 説明すると、「いいところね、行ってみたいわ！」って言ってくれるのね。でも、「想像つかないでしょう？」って言うの（笑）考えられもしないし。かいつまんで話ただけじゃね [伝わらない]。

——（朋子）私たちは島に降り立ったこともあるし、話も何度も聞いてるからわかりますけど、たぶんふつうの人は何にも想像がつかないと思います。つかないわね。

——（朋子）[人が] 住んでいたこと自体、想像つかないって言われることもあります。登喜子さんは硫黄島時代の方が幸せでしたか？

そうよね。硫黄島に兵隊さんで行ってた人が、硫黄島協会に入っていて[あったことがある]。

——（西村）[地上戦で] 生き残られたということですか？

生き残りなの、帰ってきたの。その方を紹介されて、その方が亡くなるまでずーっとお付き合いをしていたんですけど、いい方だね。島であったこともお話して、「うちは玉名山に住んでいたんですよ」って。「玉名山を下りてきて、すぐ角に石垣があって、その中に家があって」[と話をしたら]「えっ！そこに僕、[戦時中に]住んでました」って言われたの！それは鳥肌立ちましたね、わたし。こういう偶然ってあるんだろうかって。そうしたらね、「玄関入って、すぐ向こうへ通り抜けていくと縁側があって、縁側の形がカギの手 [=L字型のこと] になってるでしょう？」って説明したの。「そこに僕は住まわせてもらってました」って言われたの。いやーびっくりしたねえ……福島の方の人でしたけどね、亡くなるまで電話で話をしたり。名前、何て言ったかな……

——（西村）兵隊さんに家が振り分けられて、住んでいたんですね。

そうみたい。東、西、南、玉名山、元山、全部の部落に振り分けられていたの。千鳥の、摺鉢山の手前に最初の宿舎があったでしょう、海軍の。それで陸軍が後から入ってきたから、玉名山とか木の生い茂ったところにテント張ってね、それで住んだの。

——（西村）玉名山とか、東の方はあんまり戦闘が激しくなかったって聞いているんですけど……

陸軍の人達が来たから。海軍は南の方の宿舎だったから。海軍の宿舎は、南の、パイプ山があって、千鳥部落、そこに海軍の兵舎があったの。それで玉名山とか、こっち [=東] の部落にテント張ったのが、陸軍の兵隊さんだったの。だからずいぶん差がついていたから、陸軍の兵隊さんはかわいそうだったよ。

——（西村）そうだったんですね……

各家庭に、休みの度に[海軍の]兵隊さんが来るんですよ。うちは快く受け入れてまして、父親が料理人でしたから食事を作ったり、ご馳走したんですよ。海軍の兵隊さんは休みになると、訪問して、食事して、一杯飲んで帰るんですよ（笑）陸軍の兵隊さんは自分たちでやっていた [=食事していた] みたい。

海軍も陸軍も、兵隊さんは同じじゃないか、って思ったんだけど。でもなんとなく、海軍の兵隊さんの方が静かね、柔らかかというか。陸軍の兵隊さんの方が荒っぽかった。海自の司令官をやった人がうちの近所にいるんですよ、よく遊びに来てくれたんですよ。Yさんって。

——（西村）Yさん、知っています。

近くなのよ、Yさん。硫黄島の話は朝まででも話したいくらい、いろんな思い出があるからね。あれもこれも、細かくみんな知ってほしいと思う。だって、兄たちは残されて犠牲になった。私たちは引き揚げてきて、自分たちで住むところを調達しなくてはいけなかった。親たちはそういう苦労があった。形は違ってみんな苦労があったのよね。だから誰がいい、彼がいい、ではなくてみんな同じ苦労だと思ってね……

——（石原）お父様は、60歳未満でしたが疎開できたんですよね？ 男は60歳未満は島に残れということでしたが……

うちは2人の兄を残したでしょう？ あと、おばあちゃんがいたでしょう。あと子どもは女ばかり [で母親もいない]。だから、Sさんって役場の人。その人に言って、父親も疎開させてもらったの。私は、あの人のことは恨んでいるけどね、自分は生き残ってね。あっちもこっちも [男は] 島に残れて言ってね。それで自分 [=Sさん] も残るかっていったら、[いったん] 残ったけど、すぐ帰ってきた [=軍の飛行機に便乗して疎開した] もんね。そういうことをする人間は相手にしない。うちの姉なんかも、恨みに恨んでいたもんね。姉はうちの母親代わりでしたからね。

——（朋子）うちも2人残ることになってしまって。うちもお父さんが戻って [=疎開して] きてますが。同じような話を聞きますね、やっぱり、言われるままになってしまったって。そう言われて、2人残すことになってしまったと。

ただね、Sさんのところは卑怯だと言ったのよ。Sさんちは女ばかりなのよ。

男って言ったら小学生の子がひとり。それで男を残せて、冗談じゃないって  
いうんだよ……だって [兄は] 15歳と18歳になったばかりよ。悔しいわね  
……ほんとに妹を大事にしてくれて、牛の草刈りに行くよって言ったら連れて  
行ってくれてね、下の兄がね。上の兄はね、しつけをしてくれた。ほんとに今  
でも思うのね、兄はグアムでも逃げて、向こうで生活してくれないかって。  
それでそろそろ日本の方に顔出してくれないかなって、想像で思っているの……  
—— (石原) なんとか捕虜にでもなっていてくれれば……

そうそう、そうなの。今でもそう思うの。

—— (朋子) 生きていてくれればって……

ほんと、そうよ。今生きていたら97歳かな。昭和元年 [生まれ] だから、上  
の兄はね。いくつになってもいい、よぼよぼになってもいい。私の手を借り  
なければっていうなら、私が世話をするから。

—— (朋子) お兄さんたちは、引き揚げの時、船まで見送りに来ましたか？

上の兄は、ばあちゃんを家からおぶって、船の中まで来た。下の兄はね、悲  
しくて……

—— (朋子) 親と離れること自体、まだ10代ではきついですね。

(登喜子さんは泣きながら) 下の兄はね、波打ち際から海に入ってきてね、[登  
喜子さんたちを] 食い入るように見ていたからね。その姿が私の臉から離れな  
い……その姿が目浮かぶの。これは消したくないの……上の兄は、ばあちゃ  
んをおぶって船底まで来たから、「そのままばあちゃんのそばにいて。駿あん  
ちゃんも乗って行こう」って言ったんだけど、[他の] みんないるから乗らな  
いのよね。あのまま、無理にでも船に乗せたらこっちに来れたかもしれない、  
けど駿兄さんはそういう人ではなかったね。降りるって言って降りたの、律儀  
な人だったから。みんながそうならば、俺もそうするっていう人だったの……

—— (朋子) うちもちゃーちゃん [=フサ子さん] が言っていたけど、お兄さ  
ん達が牛に荷物を引かせて、船まで来て、荷物を積み込んだら降ろされて……

降ろされたっていうか、降りなきゃいけないから。仕方なかったの、そうや  
らざるえなかったの。自分たちだけ島から出られない。そういう友達意識が強  
いからね。みんなそうなんだから……

——（朋子）お兄さんたちは、「妹たちをよろしく」って言って、最後の言葉……

下の兄にも、船に乗らないかって訊いたけど、上の兄が戻ってくるからって  
乗らなかったね。硫黄島っていうのは、こういう悲しい島です……いらした？

——（石原）一度、2015年の墓参に参加させていただきました。[小笠原村主  
催の] 船の墓参です。

——（西村）2015年は、戦後70年の時ですね。

——（川村）登喜子さんもいらっしゃいました。その時、ご挨拶をさせていた  
だきました。

そう？

——（石原）あの年はすごい人 [=報道陣含めて参加者が多かった] でしたよ  
ね？

[以前は] 宿がなくてね。私が前の前の村長 [=宮澤昭一村長] に、墓参に  
行く船の上で、ひざ詰めで、とにかく硫黄島に宿舎を建ててくださいって言っ  
たんです。自衛隊の宿舎に泊まるか、船に戻って泊まるか[しかなかったから]、  
そんなややこしいことしないで、硫黄島に宿舎を建ててくださいってお願いし  
たの。私より上の[世代の] 人たちも[当時は] いたけど、「私しかこういう  
話をする人はいないでしょう？」って村長に言ったの。それをみんなにも言っ  
て、今こういう話を村長にしているから、みんなからもお願いしてくれて話  
したんです。それから2年後くらいかな、村長は私のことを「とき姉」って言っ  
てただけど、「わかった、とき姉の気持ちを汲んで、自分が村長をやっている  
間に、必ず宿舎を作るからな」って言ってくれたんです。そうしたら、あくる  
年から着工して、2年目にできましたよね。ありがたかったですよね。

——（朋子）やっぱり海上で寝るよりも、体の辛さもですけど、島のにおいと



かいいろいろなものを感じられますよね。

そうそうそう。外に出れば硫黄島の土の上だって、草もあるでしょう。あのね、草の萌ゆる香り。朝の草の萌ゆる香りがね、あなたたちにはわからないかも知れないけど。私たちはあそこで育って、匂いを嗅いでいるから。あの、あがってくる匂いが懐かしいのよ。ほんと、早くこのコロナが解決しないと、墓参もできないから。今年は〔小笠原村から船での墓参案内の〕手紙が来てるけど〔今年は〕行ってみるかな、と思っているのよ。〔上陸できなくても〕硫黄島を見れば、と。私、そこの老人ホームのデイサービスに行ってるんだけど、〔墓参に行くって〕言ったら、あぶないところは行かないようになって言われたの（笑）

——（朋子）是非、今年の墓参は海上からですけど、〔一緒に〕参加したいです。

うん。それには行く。

——（西村）僕も行きます。

私、村長に電話しておく。連休明けに電話しておく。村長は友達だからね。

——（西村）渋谷〔正昭〕村長はずっと硫黄島にかかわってくれていますからね。

最初っからだからね。浜松町〔=村職員として小笠原村東京連絡事務所勤務〕の時からね。

——（西村）南洋踊りを踊ってましたね（笑）

南洋踊りはやめてくれるっていうのよ（笑） やだよ。硫黄島には〔南洋踊り〕はなかったからね。踊るっていうのはね、硫黄が丘の運動場でね、みんなで輪になって。内地の音楽で〔盆踊りを〕踊るのよね。

——（西村）盆踊りの写真も見たことがあります。

——（朋子）学校の先生とか、都内から来ていたんだもんね。墓参の申し込みは5月10日までにポスト投函してくださいって書いてありました。

——（西村）僕も帰ったら出します。

墓参の、返信？ 先に〔村役場に〕電話しておくから（笑） ハガキは後から行くからって。

——（朋子）硫黄島の〔自衛隊売店で売っている〕お土産も変わったみたいなんですよ。

あら？ ホント？

——（朋子）トートバッグとか。いろいろあるんですよ。

そんなのいっぱい持ってるよ（笑） 硫黄島に〔自衛隊売店で剥製が売っている〕サソリは〔もともと〕いなかったよ！

——（朋子）戦後入ったみたいですね。私、見たことあるんですよ。

兵隊さんの荷物について入ったみたい。それが増えたの。

——（西村）変な害虫はみんな外から入ってしまったみたいですね？

硫黄島にこわいものいなかったよ。トカゲ、というかヤモリ？ ヤモリはいたね。

——（朋子）宿舎によく出ますよね。

キャーキャー言っただけ。私、島〔に墓参〕行くと食事作る役目だったけど、卒業させてもらおうわ（笑）

——（朋子）そうでしたよね。パパイヤできんぴらを作ってくれてましたけど、〔調味料は〕何を入れていましたか？ 作り方……

作り方？ あれはね、パパイヤの皮をむいたら、カンナで削ぐでしょう？ 4つに切ってから、削ぐのよ。そうしたら、炒めてお砂糖とお醤油だけど、パパイヤの実が白いから、あんまりお醤油は使わないようにして、お塩の方がいいかも。ちょっと砂糖を入れて。あんまりお塩をきかせすぎてもしょっぱくなるから。これで結構おいしくなるから。

——（朋子）入れるのはこれだけですか？

そうそうそう。あと、みりんがあってもいいけど、お砂糖でいいと思う。み

りんを持って行っても、余るし。置いてきたって誰も使わないでしょう（笑）  
——（朋子）登喜子さんの味が忘れられなくて、最近ではパイヤがスーパーでも売っているの。

私も、こっちでも作るよ。おいしいでしょう？ カンナで削いだ後に、煮るの。炒めるだけだと固いから、煮るとおいしいよ。

——（朋子）墓参に行った時に、登喜子さんとカンナで材料を切ったのを思い出としてあって。その時は、味付けを気にする暇もなくって。

2つに切ると大きいから、4つに切った方がやりやすいよ。切りながら、水に漬けてアク出ししてね。

——（朋子）食事の準備中は男の人たちは自由時間でしょう？

——（西村）あそのキッチンは、入ろうとすると「ダメ！男は！」って言われるんですよ（笑）

誰が言った？ そんなこと……手伝ってもらったっていいのよ。皮むきくらいやってほしいわよね。

——（朋子）鹿島〔建設の従業員の人〕が持ってくるの〔＝パイヤ〕は、すごく大きいから。

そう言えば、鹿島のあの人はもう定年になったかな？

——（西村）30年以上〔硫黄島に〕いた人ですよ。

いたよね。あの人は〔墓参や遺骨収集のときに〕何でもやってくれたの。私がお願いすると、すぐそばに飛んでくるのよ。あの人は全然〔内地に〕帰ってこないもんね。定年になってやっと帰ってきたのかな。硫黄島が好きで好きでねえ……

——（朋子）好きにはなっちゃうよね……

——（西村）わかれるみたいですけどね。好きになる人とそうでもない人と……

定年になるっていう時、電話をくれたのよね。もう2年以上前だったかな？

——（西村）登喜子さんは遺骨収集も行かれていたから〔鹿島建設の人とも交

流が深かった] ……

そうそう。遺骨収集だと15日間行ってるからね。それは何年続けたかな、7年くらいかな。

——（朋子）遺骨収集はいかがでしたか？

これは、2人の兄の遺骨だと思って、一片でも「兄のものだと」そう思ってやるようにしていたの。「出てきた、見つけた時は」ご苦労様でしたって……行った初めての年かな、壕の中を、西の、千鳥海岸と西海岸の間の壕の中を、作業していたの。土を掻いていたら、なんかゴリゴリするなと思ったら、鉄兜だったの。あら、鉄兜が出てきたよ、なんて言っていたら「ご遺骨が」かぶったままだったのよ。ほんと辛かったね、泣いたね……ご苦労様でした、いまだに鉄兜をかぶったままで、外してあげるからねって、楽にしてあげますからって。そのまま厚労省の方に渡して。鉄兜の中には名前も書いてあったから、ご遺族にお返しいただくように言ってね。そういうこともあったのよ。一体でもね、探し出してあげて良かったよね。硫黄島を守ってくださるために来てくれた兵隊さん、他人様も、自分の兄も一緒だと思ってね。「島に住んでいたときに」玉名山に駐屯していた陸軍の兵隊さんに良くしてもらっていて、住まいも近くにいて。最後「＝強制疎開のとき」も「トキ坊、知らない土地に行くんだから、気をつけて行くんだよ」って言ってくれたのよ。墓参の時に、その方の思い出は何かないだろうかと思い出して、書き残したものとか無いだろうかと思ったの。玉名山の中に「……聴き取り不可能……」が半分欠けてて、あったの。そこに、その方の名前が書いてあったのね。玉名山のうちのすぐ近く、その方が駐屯されていたのもそこだし、名前もその方のものだから、間違いのないのよね。その方のね、「親族の方を」調べてね、お手紙でも出してあげれば良かったかな。でも、硫黄島に行くとあれもやりたい、これもやりたいって、2人の兄のことでね、夢中になっちゃう。

——（西村）時間も限られていますね。

でも〔2代前の〕村長が宿舎を造ってくれたから感謝しているよ。

——（西村）1世の方は硫黄島でやりたいことがたくさんある中で、〔ここ何年も〕いろいろな理由で墓参が中止になって、行けないというのはすごく〔残念に〕思うところがありますよね。

I君は〔硫黄島帰島促進協議会の〕役員やってるんでしょう？ 墓参で行ったら、見かけないなと思ったら、汗びっしょりで帰ってくるのよ。パパイヤと島唐辛子取りをやってるの（笑）

——（西村）そうですね（笑）

ちょっと、あなたふざげたことやるんじゃないよ（笑） 何しに来てるの？ パパイヤ取りに来てるの？ 墓参に来たんじゃないのかいって（笑）

——（西村）「取りすぎだよ！」って言われてましたね（笑）

「何やってるの!？」って言われたもんだから、みんなに一つずつ配ってる



の（笑）お漬物にするとおいしいのよね。ぬかみそやってる人はぬかに漬けるとおいしいし、押し漬けてもおいしいし、煮てもおいしいよね。大根煮るみたいにして煮ればいいから。5センチくらいに切ってね。大きいと、硬くて煮えないからね。切って、水に漬けてアク出しはしてね。

——（西村）（牛と一緒に写っている写真を見ながら）これ、僕のおじいちゃんです。

こうちゃん？ 硫黄島では有名なの。かっちゃんこうちゃんって。おじいちゃんがかっちゃん [=勝一さん]、お父さんがこうちゃん [=耕一さん]。硫黄島と一緒にいきたいね……

——（朋子）やっぱり上陸したいですね。

そうだよ、船の中、船上でって言うなら、行っても行かなくても同じだよって言いたい。今回は無理でも。船の上からでも[仕方がないから]行くけどね。

——（朋子）朝、[おがさわら丸で]硫黄島の近くまで着いていて、噴火の匂いがするんですよ。

そうよね。あそこ、西海岸から見えるところ。最初小さくて、少し湯気が出ているくらいだったのが、今ではこんな穴が開いちゃってね。どうなっただろうね、見てみたいね。遺骨収集に行っていた時に、こっちかたがドカーンって爆発したのよ。何事かと思って、飛び出していったら、30メートルくらいの穴が開いてるのよ。西海岸のところ、島民墓地のすぐのところ。

——（朋子）あそこはいまだに活発ですね、島民墓地の奥側。[沖にあった]

監獄岩が[硫黄島の隆起・拡大のために島から]すごく近くなりましたよね。

あそこも隆起しているからね。釜岩が[硫黄島と]くっついちゃったでしょう？ 監獄岩もじきに歩いて渡れるようになるね、なんて言ってたもんね。

——（朋子）いつか行けますね。

でもあそこは怖いよ、歩いていると。海の中浸かって歩くと、サメが来るから……あそこはサメの通り道だって言ってるよ。昔は深かったからね。昔、漁

師の人達はサメも獲ってたね。

——（朋子）食べてたんですか？

食べる人は食べてたけど、臭くて食べられるもんじゃないと思った。やだ、気持ち悪い（笑）

——（朋子）（笑）

硫黄島の話し方ってこんななんですよ（笑） 島民に戻っちゃった。でもうれしいわ、2人の兄のことを思い出して、こうして硫黄島の話が出来てね。いい供養になりました。ありがとうございます。

——（西村）こちらこそありがとうございます。硫黄島の方言もいろいろ知りたくて調べているんですけど。

そんなにないけど、「そうだじゃー」とか。

——（西村）「そうだじゃー」はばあちゃんも使っていました。

そうだろう、って意味よね。乱暴なのよ、言葉遣いが（笑） 方言っていう方言はないのよ。

——（西村）八丈島はどうですか？

八丈島は特殊だから、あんな「硫黄島のような」話し方ではない。うちのばあちゃんは八丈島出身だって言ってたけど。ばあちゃんは高貴な出らしくて（笑） お公家様だったよって。

——（西村）うちの先祖も八丈島だって言っていましたね。

八丈島ってね、みんな流人の島だって言って馬鹿にするけど、その昔はそうじゃないんだよね。

——（川村）登喜子さんのおじいちゃんの代で硫黄島に渡ったんですか？ どういう経緯で硫黄島に渡ったのでしょうか？

父親の兄弟はみんな八丈島なの。おばあちゃんも八丈島の出身みたいなの。八丈島は「奥山」っていう苗字が多いしね。八丈島出身だっていうのは聞いてて。硫黄島の言葉っていうのは、特別ないけど、乱暴なのよね。「そうでしょ

う」っていうのを「そうじゃ」って言ったり……

——（西村）ばあちゃん [=康子さん] がよく言ったのは、卵とかを落として割ってしまった時に「ぶちった」とか「ぶっちゃけた」って。

壊れたとか、壊したっていうのを「ぶっちゃけた」って言うのよね。おもしろいよね。

——（西村）おがさわら丸のデッキに行くと、「海にぶっこちなよ」って言ってました。「早く戻ってこいよ」って。

語尾が上がるのよね（笑）

——（西村）「あんまり飲むな」「とうちゃんみたいになるから」（笑）

私はちゃんと聞いて知ってるから。あなたのおじいちゃん [=耕一さん] のことは良く知ってるから。

——（西村）ふだんはおとなしい人だったんですけど。

怜馬君、お酒は飲むの？

——（西村）ふだんは飲まないんですけど。人が集まった時とか。

飲まない方がいいよ（笑）おじいちゃんのこと知ってるから。ばあちゃんがどれだけ心配したか……

——（朋子）おばあちゃんのはんびりというか、静かな人だったけど……

康子ちゃん？ 康子ちゃんは静かな人。ゆっくりしゃべる人で。

——（西村）テレビで見たら、すごい上品に見えました（笑）ふだんよりも、こんなに静かにしゃべって……

それはテレビに出れば違うでしょう（笑）わたしの父親の弟が、硫黄島の海にタコ取りに行つて。一人で出て行つたらしいのね、カヌーか何かで行つたのかな。そうしたら帰ってこなかったんだって。上がってこなかったんだって。私は、仏様を大事にする人でしょう？ それは、母親が2歳の時に亡くなって、父親に、母親に手を合わせることを教えられてたのね。それがあから、仏様にご飯をあげたら、それを下げて捨てるなって、食べさせられたり。そういう



ものなんだって、当たり前だって。仏様だって、一緒に生活していた家族なんだからね。粗末にするんじゃないって、そういう教えだったから、大事に大事にするの。それで、一回私がね、すごく具合が悪くなって。何だろうと思って、見てもらう人に見てもらったのね。そうしたらね、事情を一切言っていないのに、「あなたにはね、びっしょり濡れた仏様が憑いていて、供養してほしいって言っている」って、言われたの。「えっ？ でも私は知らない」って言ったんだけど、父親がまだ生きている頃だったから、うちに帰って、すぐ父親に訊いたの。「そういう仏様いるの？」って訊いたら、「いるよ、うち [= 父親] の弟」って。今でも私はご供養してますよ。そういうこともあるのよね。だから私が仏様を大事にする人間になったことは、家族にはお礼を言いたいね。今もこうして、供養ができているから。仏様といえども一緒に生活していた人なんだよって言われたの。

——（西村）お墓参りは大事ですよ。

お墓参りは大事ですよ。お彼岸が2度あって、お盆があって。お塔婆もあるでしょう、あれ [= 戒名] を書いて、お塔婆をお墓に立ててあげるだけで、ご供養になるんですってよ。

——（西村）硫黄島の墓参は、まさにお墓参りですからね。簡単に今年に行けませんってならないでほしいですよ。

そうですよ。遊びで行くわけではないですからね。私の母が硫黄島に眠っているでしょう？ でもね、赤ちゃんがおなかにいる時に、ぶついたり、尻もち突いたりした時は、すぐにお医者さんに行って診てもらってね。うちの母親は、硫黄島で無医村だったでしょう？ 玉名山から下っていく坂道で滑って、尻もち突いたの、妹 [= 末子さん] がおなかにいる頃に。それを誰にも言わずに内緒にしてたんですって。そうしたら、出血してたのも内緒にしてたの。赤ちゃんが生まれると、<sup>あとざん</sup>後産ていうのが出てくるけど [= 胎児分娩後に胎盤などが排出されること]、それが下りなかった [= 排出されなかった] んだって。それ

が胸を圧迫しちゃって、窒息死しちゃったの。だからうちのおじいちゃんっていう人は、お医者さんの免状、南〔部落〕のお医者さんだったんだけど、その時たまたま東京に出ていて、留守だったの。運が悪いのよ。自分がいなかったばっかりにって残念がっていたよ。

——（西村）離島ですからね……

あってもね、やっぱり内地に来なくてはダメなのよね。硫黄島に医務室はあったけど、結局は傷の手当とか、それしかないからね。

——（西村）今の父島でさえ、そうなんですよね……

硫黄島でお菓子屋さんがあったの。元山のね……

——（西村）硫黄島にお菓子屋さんがあったっていうのは、素敵なお話ですよ。

そういうものはね、豊富だったよ。うちの父親もかりんとうを焼く機械を、横浜から仕入れてきてね、うちでかりんとう作ってくれたの。料理する人だったから、なんでも吸収してきてね、そういう機械も買ってきたの。ビスケットも焼いてくれたの。

——（朋子）おしゃれですね！

そうなの。着るものもおしゃれ、スタイルもおしゃれ。すべておしゃれなのよ。

——（朋子）うち〔=水口家〕なんて、米を揚げておやつにしたとか、そういう話だったから、食べてるものが違う（笑）

——（川村）登喜子さん、お肌もツヤツヤですよ。

——（朋子）10代まであんなに日が強い島にいたのに。日焼け止めとかもない時代ですよ。

日焼け止めなんて付けたことないよ。真っ黒に焼けても、そばかすも何にもできない。潮風も強かったけど、島で生まれて島で育ったから、風土に慣れちゃったのよね。

——（石原）こっちに来た時は寒く感じたんじゃないですか？

寒い寒い（笑） こんなところで生活するのかねって思った……

——（石原）疎開先が、福島県の浜通りですよ？

そうそうそう。浜に近い方ですからね、寒かったですよ。

——（朋子）雪も降りましたか？

積もってましたよ。雪を初めて見た時には衝撃でしたね！「これ、どうやって歩くんですか？」って（笑）下駄でしょう？草履じゃなくて……下駄の歩き方がわからなくて、歯の間に雪が固まっちゃって、そのまま歩いていたら、ひっくり返っちゃったのよね。雪は落としながら歩くのよね。歩き方から、友達に教わりました。でも足元は濡れるのよね。ありがたいことに、同級生はよくしてくれてね、全部教えてくれて、ありがたい友達でしたよ。[近年まで]ずっと付き合っていましたよ。ほんといろいろあったよ……なっちゃん [=朋子の従妹の夏美さん] に会ってみたいな。

——（朋子）今回、[船での墓参に] 来るので会えます。

私のこと、忘れてないかな？

——（朋子）全然忘れてないです！ 最近も登喜子さんの話しましたので。

やっぱり、硫黄島の話すれば、登喜子さんの話が出てきます。

——（西村）3世の会も、朋子ちゃんとかなっちゃんに最初に話して始めたことなんで。

ああそう。忘れられないように、いろいろと知ってほしいよね。やっぱり興味を持ってもらって、行ってもらいたい。行けばいいところだって気に入るのよね。

——（西村）父島に住んでいる人も、硫黄島はまた別だって言いますよね。

全然違うもの。父島に[住居を]用意するから、住んだらどうって言われたら、私断る。父島だったら行かなくてもいい。

——（石原）そういうお話があったことは？

ないない。[返還後も] ない。でも、結構[硫黄島民が父島に] 行って[住んで]るよね。宮川一族なんて、みんなそうだもんね。

——（石原）母島の硫黄島民向けの開拓地のお話もありましたか？

ああ、あった。でも、母島の畑で〔自分に〕何ができるのよ？ 手紙を見ながら、ひとりごとと言ってたのよ、〔母島の開拓地の〕<sup>こうもりだに</sup>蝙蝠谷がどうのとか。コウモリって言えば、硫黄島墓参に行く時に船の中に入って来たことあったのよ。私ね、船で寝てたのよね。そうしたら私の胸にふっと乗っかるものがあるの（笑）捕まえてね、網で取ってね、放したの。どこまで飛んで行くか（笑）あとね、何か上に乗ってきて。なんか臭いなどと思ったら、お魚（笑） 山下賢二〔全国硫黄島島民の会名誉会長〕とかね、そういう人達が、私にいたずらでそういうことするの。

——（西村）賢二さんと初めて会ったのは、父島から硫黄島に行く〔墓参の〕船の中で。その時はばあちゃん〔=康子さん〕も一緒に。耕一の孫だよって紹介されて、「耕一の孫と飲めるの？ 今日」って言われて、その時は朝まで飲んだ。

そうやって酒を覚えるんだから。そういう大人と一緒にになると……

——（西村）それで朝になって、気がつくと〔船が硫黄島に近づいて〕硫黄の匂いがしてきて。

硫黄の匂いがしてくるのよね。行きたいな、みんな連れて行きたいな。うちの父親、奥山金一って言うんですけどね。きんちゃんきんちゃんって言われて慕われてました。きんちゃんはきれいな酒飲みだって。

——（石原）<sup>とうちゅう</sup>糖酎を飲んでらしたんですよね？ あの強いお酒を、ストレートで飲んでいたんですよね？

ストレートです。でも、潰れている姿を見たことない。

——（石原）それは相当なもんですね（笑）

強いは強いですけど、これが限度というのを覚えているんでしょうね。大したもんでしたよ、うちの姉たちもみんな言ってましたよ、近所のおばちゃんたちも言ってましたよ。

——（石原）内地に来てからも飲まれていましたか？

飲みましたよ、お酒は好きでね。亡くなったのは66歳でね、昭和34年に亡くなったの。

——（川村）お父様が硫黄島について書き留めたものはありましたか？

私の手元にはないかな、何にもないな。姉のところにも全部、奥山のもの置いてあったのよね。それを全部持ってくれば良かったんだけど……

——（西村）それはどうなっちゃったんでしょうか？

旦那が一人いて。でも〔硫黄島について〕全く興味のない人だからね。処分しちゃったんだと思う……

——（川村）先ほど、最初の〔小笠原島〕硫黄島帰郷促進連盟の頃、お父様が  
お姉さまではなく、登喜子さんを連れて行ってたとお話しされていましたが、お父様は「硫黄島に戻りたい。住みたい」とお話しされていませんか？

それはもう、言っていましたよ。「帰れるようになったら、かならず帰ってくれよな」って言ってましたから。それを私は父親の遺言だと思うから、頑張っ  
て、どんな形でも硫黄島に行かれる限りは行こうと思っているんです。硫黄島  
に生活できる家があるんだしたら、私は硫黄島に行って生活したいわね。  
お水が不自由でも、タンクを掘れば〔生活〕できるのよね。タンクもちゃんと  
やれば、セメントで全部固めれば、水も漏らない。全部そうして生活していた  
んですから。だから、どこの家でもタンクを持っていましたよ。タンクを4つ  
持っていれば裕福な、左うちわの生活って言われたよね。でも、うちはタンク  
を6個持ってたのよ。だから硫黄島行けば、ここにタンクがあった場所って思  
い出す。あんたん家〔=水口家〕のちょっと行ったら、玉名山でしょう？ あ  
んたん家の上がっていく手前に大きいタンクがあるの、そこからずっと通って  
玉名山なの。あの細道はみんなが通って道になったの、近道だからみんなに通っ  
ているうちに道になったの。元山行くにも、いい通りだったから。みんなそう  
やって作っていったの。フサ子さんとかは覚えていると思うけど、うちの甘蕪<sup>かんしょ</sup>

畑，あんたんちの上がっていくところの下にずーっとあったのよ，甘蔗畑。甘蔗ってわかる？ サトウキビ。

——（石原）コカ栽培も増えてきたけど，まだサトウキビも栽培されていたんですね。

そうでしたよ。今も生えています。島民墓地のところにさとうきび生えていますよね。コカの栽培の方が多かったですね。そうそう，うちもかなり広い甘蔗畑がありましたよ。あれね，折るの。

——（石原）コカも，甘蔗も，両方あったんですね？

そうそう。コカが生活の糧でしたね。乾燥場があって。

——（石原）甘蔗も会社に納めていましたか？

そうそう。機械場っていうのがあって，あそこにあってね。下から大きなトラックに積んでね，上までずーっと上がっていくのよ。うちの横通っていくのよ，玉名山の坂上がって，トラックで。そうすると私たち，トラックに付いて行って「1本くれー」っていうの（笑）栗林中将，あの方がうちの横を通ったの。着任した時に島全体を見て歩いたのね。その時，ぐるーっとしたの，セイモ海岸から上がってきて，うちの横の道を通って，玉名山から元山〔部落〕の宿へ行くと。手を振って。でも私は，栗林中将が誰だか知らなかったから，「どこから来たんだい？ 何しに来たんだい？」って訊いてしまったの（笑）後で「一番偉い人だよ」って聞いたの。子どもは知らないよね。せがれが今，政治家でしょう？

——（石原）孫ですね，新藤〔義孝〕議員。

——（西村）うちの祖母は墓参の時に，海上自衛隊〔硫黄島航空分遣隊〕の司令官の方に「いつの船で帰るんだい？」って聞いてました（笑）

——（西村）あの人「硫黄島に残る」って言ってたよって。あの人，司令官だよって。

私は今考えてみると，硫黄島にいて大人になったらどうしただろう？ 私は

硫黄島の人とは絶対結婚したくないと思っていたから（笑）結婚なんて考える歳でもないのにね。

——（朋子）東京に出たいとは思っていたんですか？

思わない。まあ、でもわからないけど。大人になってみて、好きな人が硫黄島の人だったかもしれない。子どもの時は、硫黄島の人とは結婚したくないと思っていたな（笑）子どもの考えることだからね。

——（西村）硫黄島で嫌なことはありますか？

なんにもないね。全然不便だって思ったこともないし。親も姉たちもみんなこの生活をしていたでしょう？ みんなそうしていたから、こんなもんだと思っていたよね。そこに馴染んだ生活っていうのは、そういうものなのよ。

——（朋子）うち [=水口家] もそういう話は聞かないですね。疎開後の辛いことはいっぱいあったけど、それは硫黄島時代が良かったから。あのまま硫黄島で幸せに暮らしたかったって。

硫黄島を出たいっていう気持ちはなかったよね。でも大人になって、そう思うかもしれない。父親が横浜に行ったりしている人だったから。どういうふうを考えているかわからないけど。父親は、家族みんなが近くに住んでる方がいいと考えている人だったと思う。だから父親もずーっとそばだったもの。親の言うことは、聴いた方がいいよ。親っていうのは、そう間違ったこと言うものじゃないけど。飲んだくれてね、頭がアルコールで焼けちゃってるような人はダメだけど。ほんとだよ、そういう人いるから。この程度でやめとけばいいのに、って人いっぱいいるんだから……

——（石原）お父様は、内地では日本酒ですか？

硫黄島の頃から、糖酎と日本酒を飲んでましたよ。日本酒は島に入ってくるの。糖酎は〔島で〕作っていたから。日本酒の方が好きでしたね。横浜と行き来していたからね。

——（石原）内地に行ってから、糖酎が懐かしいとかは？

やっぱり欲しかったんだと思う。でも私たちは、お酒がどんな種類あるかってわからなかったからね。

——（石原）料理も最後までされていましたか？

最後は私にバトンタッチしましたけど。肉の焼き方はこうやってとか、レアに焼くんだって。レアってどういうものか知らない、そうしたらこういう風に焼くんだって、ちゃんと教えてくれてね。ただし豚肉だけはちゃんと焼けて。鶏肉はお刺身でも食べるけど。

——（石原）島では、鶏肉もお刺身で食べていたんですか？

食べていたんじゃない？ 売っていたから。私は、食べない。魚でも生で食べなかったから。生臭くて、大嫌いで。今はね、結婚してからは旦那さんに合わせなきゃと思って。その代わりわさびとか、からしとかべとべとつけてね(笑)

——（石原）島の方が、新鮮な魚食べてますよね？





そうなんだけど、嫌と言ったら嫌。よーく煮たり焼いたりしたら食べますけど。山下賢二さんに「あんたはね、モグリだね」って言われたの（笑） 「あんたは島の間人じゃないよ」だって（笑）

——（西村）山下さんはよくそのセリフを言っていました。「これ全部飲めないのは島の間人じゃないよ」って（笑）

——（石原）遺骨収集は7回行かれたのですね？

そうですね。でも、遺骨が残っているっていう壕へはどうしても入れなかったですね。わたしはね、胸が苦しくなっちゃって。きれいに収集した後にはお線香をして……

——（西村）遺骨収集も「期間が」1週間だったら「僕も」行けるんですけどね。「今の職場を」2週間休んじゃうと、クビになっちゃうかな（笑）

ふとっばらな社長さんだったら、行ってこいってなるんじゃないかしら（笑）